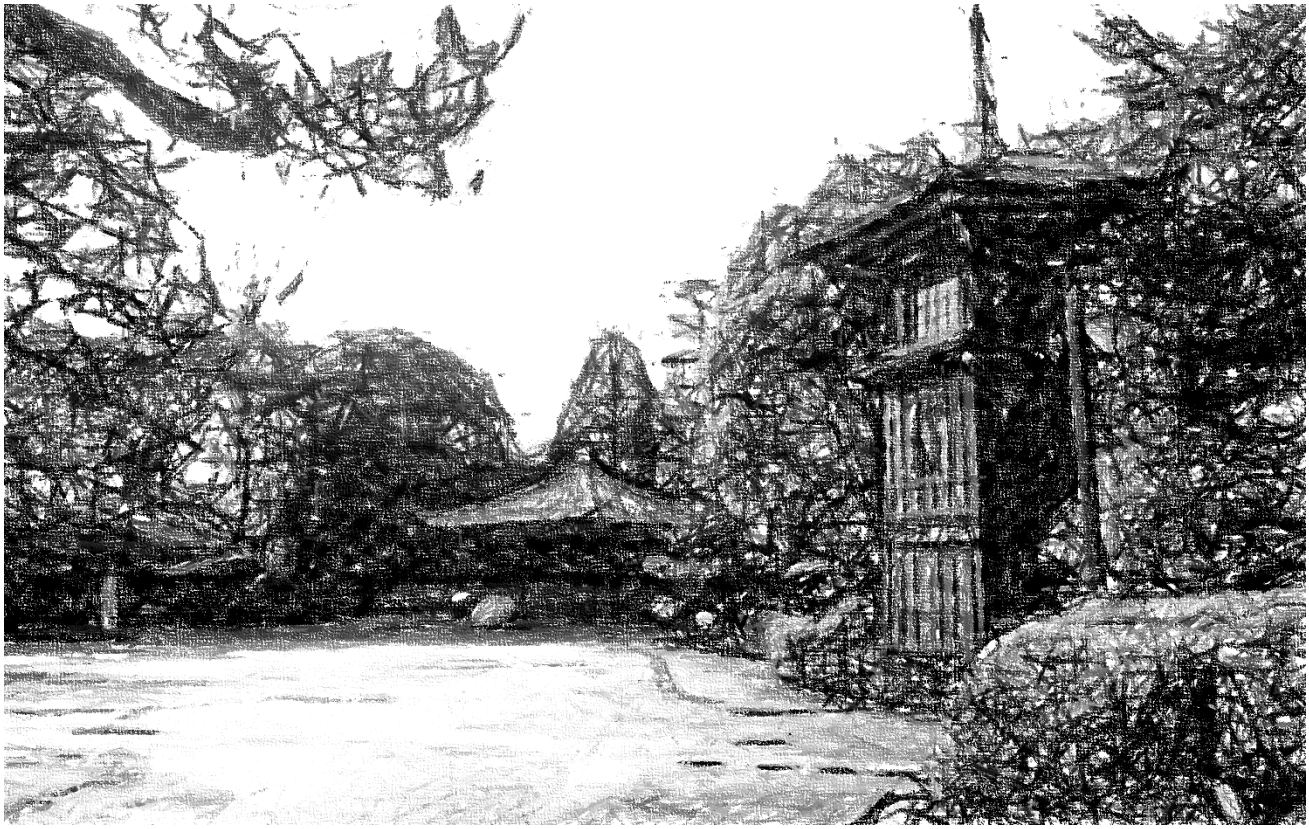
名勝哲学堂公園保存活用計画

資料編



中　　野　　区

資料１. 七十七場の順路

七十七場の順路は、円了が自ら哲学堂を解説した『哲学堂独案内』を、嫡子玄一が補足して編纂した『哲学堂案内』（昭和 43 年刊行）に詳しく紹介されている。その順路を以下に示す。

なお、本文は『哲学堂案内』を現代語訳などに直している『現代版　井上円了　『哲学堂案内』』（三浦節夫著）とする。

① 哲理門および常識門

本堂の入り口には石柱が二個あって、右の柱には哲学関と刻し、左の柱には真理界と刻し、この境内は哲学上、宇宙の真理を味わい、同時に人生の妙趣を楽しむ所であることを標示しておく。その内側の右の方にある一棟は鑽仰軒〔現・事務所、鑽仰は、聖人・偉人などの徳を仰ぎ尊ぶ〕と名づけて、門戸を監守するために設けたのである。

つぎに、左の方の一門は四聖堂の正門であり、これを哲理門と名づけ、その門柱には「棹論理舟溯物心之源鞭理想馬登絶対之峰〔論理学を上達させて物の核心（コア）を突き止め、あくまでも理想を追い求めて絶対という世界に登りつめよう〕」と題してある。そして、その両側には仁王尊の代わりに、天狗と幽霊との彫刻物を入れておく。これはあまりにも物好きのようなのだが、この地に以前から天狗松と幽霊梅があったのにつながる意匠〔デザイン〕　である（彫刻者は田中良雄氏）。

世間一般が信じるような天狗や幽霊はもとより迷信なのだが、その中には一分の真理を含んでいるところがある。すべて物質界にも精神界にも、その根底には「理外の理」すなわち不可思議を備えている。もし人が、物質界において不可思議の一端に接触したときに思い浮かべるものが天狗になり、精神界において同様の感を浮かべたものが幽霊になったものと思う。

天狗は物的であると同時に陽性であり、幽霊は心的であると同時に陰性である。したがって、一方は男相であり、他方は女相であると決まっている。こういう哲学的意味からさらに標示して「物質精気凝為天狗心姓妙用 発為幽霊〔物質の純粋なエキスが凝り固まって天狗となったのであり、心の本質の不思議なはたらきが人体を飛び出して幽霊となるのだ〕」と掲げておいた。ところが、世間ではこれを妖怪門と申している。この門から一直線に連なっている垣根は、世間の多元的見解と哲学の一元的見解とを区分する境界なので、これを一元牆〔牆は垣根〕と名づけた。

そして、多元的とは事々物々の差別する方面をいい、一元的とはその深底に潜在する一大原理を指した語と見てよい。その垣根の他端にある門は普通の出入り口なので、これを常識門と題しておく。また、その柱には「四聖堂前月白風清六賢台上山紫水明〔四聖堂の前に立てば、月は煌々として照り輝き、清らかな風が吹き渡っている。　六賢台の上に立つと、山川の景色は清らかでなんと美しいことだ〕」と標してある。この門の右側に来観者の入り口があるから、何人を問わず堂庭内を参観しようとする方々は、この入り口から出入りするように願います。

② 髑髏庵、鬼神窟および天狗松

常識門に隣接する一棟は髑髏庵と名づけ、骸骨を掛けて標示してあるが、決して肉体の死を意味するのではなく、精神上の死を形容したのである。そして精神上の死とは、世間にいて俗塵に汚された心が、ひとたびこの庵に入って消滅するという意味で、塵心 俗情〔俗界の情欲にけがれた心〕の死を骸骨に例えたのである。来観者は必ずここで休憩して、帳簿に住所氏名を記入することを願い上げます。そのときには粗茶を進呈することになっているから、遠慮なく番人に命じてほしい。

髑髏庵に連なって小廊下があるが、これを復活廊と名づけたのは、ひとたび死んだ塵心が再び蘇生して〔生き返って〕、新しく哲学的心眼を開くはずの意味を寓した〔例えた〕のである。つまり禅宗で、ひとたび己の心を殺して再び生かすことを教えるのと同様である。これより後は精神界が俗的を離れて霊的に化するから、復活廊に結び建てた二階造りの一棟を鬼神窟と名づけ、その内室を接神室と称し、その楼上を霊明閣と題しておく。従来の休憩所がすでに狭くなったので、特別の珍客をここで歓迎することもできる。

この迎賓室のそばに相連なる松林の中、一株屹立する〔高くそびえ立っている〕長松がある。その名を天狗と言ってきて、遠くから望むときは哲学堂の目標となって、人は「和田山や一本高し天狗松」と呼んでいるほどである。村内の者の伝説には、昔この松を切ろうと試みたことが数回あったのだが、そのつど天狗が邪魔をして果たすことができず、はなはだしいときには、木から血が流れ出たなどと申している。もし、その松を天狗とすれば、他の数百株の小松は木葉天狗と名づけてよい。

これより、庭内巡覧の順序に基づいて説明することにしよう。

③ 四聖堂の内容

髑髏庵の休憩所から出て第一に参観しなければならないのは、根本中堂〔中心になる堂〕ともいわれる四聖堂である。その周囲の平坦を、哲学の時間・空間を表示するものと決めて時空岡と名づけ、その一方の林叢〔林と草むら〕は百科叢と名づけた。ところで、四聖堂は四方正面の建築であり、中央に本尊を安置してあるが、その本尊は宗教的偶像ではなくて哲学的理想である。

さて、哲学の起点となり基礎となり骨目となるものは、物と心とのほかにあるべきはずはない。そこで、まずこの二者を形に示すことにたいそう工夫を凝らし、心すなわち精神は円形・赤色・透明であり、同時に光があるはずのものなので、球灯を中央に掛けることに決めた。その周辺にハートの形をあらわしたのは、そのためである。つぎに、物すなわち物質はその正反対なので、方形〔四角形〕・黒色・不透明であり、しかも心を汚すはずのものなので、方形の香炉を灯下に置くことに決めた。

その周辺に「マッター」および「物」の字を入れたのは、そのためである。我々の本心は清浄無垢〔清らかで汚れなく、混じりけがない〕であっても、わが感覚が外界の物質に誘い起こされて、いろいろの欲情・妄念を引き起こす点は、透明の球灯が香炉の煙によって曇らされるのに例えて、ひとたび曇った球灯も時々ふいてみがけば、本来の透明を持続することができるように、わが心がひとたび物欲によって汚されようとしても、絶え間なく修養の功

を積めば、決してその清浄性を失うことなしということに比較した意匠である。

④ 四聖堂の天井

つぎに、物心以上の装置についてはさらに工夫を凝らし、哲学は物心を起点とするが、もしその本源・実体を究めてくれば、必ずこれより以上の実在を考定しないわけにはいかなくなり、その体を名づけて絶対とも無限とも不可知的とも、種々の名称を与えておく。しかし、このような本体は無形・無色であり、とうてい形容することができないものである。

そこで、かりに形相ある方面について物心の本源を考えると、この漠然とした宇宙、この森然とした世界が、太初 混沌未分〔天地が開けた初めの時、天地がまだはっきりと分かれていなかった状態〕の時に、物心を胚胎した〔みごもった〕と決めて差し支えない。

ここで世界開闢〔世界の始まり〕の状態を表示することを思いつき、これを古史と見比べて確かめると、天地がまだ分かれない時は鶏の卵のようであるという説がある。日本および中国では鶏子に例えているが、インドにも大卵化成説〔『外道小乗涅槃論 』に、もと日月星辰、虚空および地なく、ただ大水あり、時に大安荼を生ずる。鶏子のように、周囲は金色なり、時が熟して破れて二段となる。一段は上にあって天となり、一段は下にあって地となる。この二つの中間に梵天を生ず。一切衆生の祖公と名づけ、一切有命無命の物を作るとある〕があるから、物心を代表する灯明と香炉との上に、銀色ガラスの天井を張り、その中央に半球の金色ガラスを挿入した。そうして、その銀色は鶏卵のシロミにあたり、その金色はキミにあたり、前者は宇宙の神髄であり、生元を含むものとし、後者は宇宙の体質であり、養料を有するものとし、その生元が化醇して〔まじり気がなく純粋にする〕心元を開発するに至り、その養料が凝結して物元を形成するに至ったところを表示して、球灯は金球から直下し、角炉は銀色ガラスの周辺から垂下する意匠をあらわすことに決めた。

そしてその周辺の四脚は、いわゆる天の四極〔中国の神話に、四極が廃れ土地が裂けて天が崩れてきたので、鼇（スッポン）の足を切って四極に立てて、五色の石を練って天を補った〕にあたることになる。これ、物心の本体である絶対の有形的方面を形容した意匠である。あるいはまた天・地・人に配当して、天井を天とし、香炉を地とし、球灯を人としてもよいと思う。

つぎに、周囲の天井に丸木のタルキを用いたのは、宇宙の神髄より放射する光線の形容なので、つまり絶対の本体から放たれている真・善・美の光と解釈してよい。すでに心は円形と決め、物は方形と決めたために、本堂そのものも、柱は円く堂は角であるように建築することに決めた。 そうした理想を建築上に現示するについては、武田吾一氏、大沢三之助氏、古宇田実氏を顧問とし、実際の設計は山尾新三郎氏の手に成ることになった。なにぶん貧しいわが身なので、最少の費用で建築する方針をとったために、理想の十分の一も実現することができず、そのためこれを一覧する諸氏は、必ず児戯のようだと一笑するかもしれないが、私の苦心の一端を推察してくれることを望む次第である。

⑤ 四聖の選定

堂宇の設計について説明した上は、四聖の由来を述べておきたい。四聖とは、孔子、釈迦、ソクラテス、カントの四聖人のことである。すでに哲学の本尊は、前述のように物心および宇宙であるとしても、人がよく道を広め、道が人を広めるのではない道理で、その中に潜在する真理を、よく世間に紹介したのは東西古今の哲学者である。そこで、哲学堂内にその人々を奉崇〔尊び、たてまつる〕したいと思って、なにぶん数が多い哲学者なので、代表者を選定しなければならないと思い、自らその選定法を案出した。

つまり、現在では世界の哲学が東洋と西洋とに分かれ、東洋哲学は中国とインドとに分かれ、西洋哲学は古代と近世とに分かれているから、その一つ一つから一人ずつの代表者を選出する新案である。まず中国哲学では、老子と孔子との二人の大立者があるけれども、多くの人の見るところでは、老子よりも孔子を選挙するであろう。

またインド哲学では、多教の意見に照合しても、釈迦を特に選ぶべきである。

つぎに西洋の古代哲学では、プラトンやアリストテレスのような大家がいるけれども、その学の開山となり、その人の師父にあたるのはソクラテス（瑣克刺底）である。」だから、ソクラテスを選ばなければならない。

また近世哲学では、群雄が四方に割拠するありさまなのだが、今から百余年前に、欧州の哲学界を統一したドイツのカント（韓図）を除いてほかに、当選すべき人はなかろうと思う。これらの四大哲学者は、実に学徳ともに備わり、哲学界における聖人であるから、これを四聖と称して、堂に奉崇することに決めた。もし表をもって示せば、下のとおりである。

- 哲学
  - 東洋哲学
    - 中国哲学 …… 孔聖〔孔子〕
    - インド哲学 …… 釈聖〔釈迦〕
  - 西洋哲学
    - 古代哲学 …… 瑣聖〔ソクラテス〕
    - 近世哲学 …… 韓聖〔カント〕

こうした理由で、堂内の宇宙天体を表出する装置の四面に、この四聖の扁額を高く掛けるに至った次第である。

⑥ 南無絶対無限尊

従来哲学堂の四聖堂内には、宇宙と物心とを対向させた意匠を物象にあらわした物だけを用いていたのだが、これは理想的本尊に過ぎない。つまり、向上的本尊というはずのものである、これに対して実際的本尊すなわち向下的本尊を設ける必要を感じ、四聖堂内に「南無絶対無限尊」と刻した石柱（唱念塔）を併置することにした。その説明は次のとおりである。

自分が思うには、哲学の極意は、理論上は宇宙真源の実在を究明し、実際上はその本体にわが心を通じ合わせて、人生に楽天の一道を開かせるにほかならない。ここに、その体を名づけて絶対無限尊という。空間を究めて果てのないのを絶対とし、時間を尽くして限のないのを無限とし、高く時空を超越してしかも威徳広大無量であるのを尊とする。これにわが心を通じ合わせる捷径〔近道〕は、ただ一心に「南無絶対無限尊」と反復唱念することにある。

人ひとたびこれを唱念するときは、たちまち憂鬱はなくなり、苦悩は減り、不平は去り、

病患は減り、多くの悪い波は自然に静まり、無数のいつわりの雲は自然に収まり、すぐに心の中には楽乾坤〔楽天地〕を開き、精神には喜びをあらわし、胸中には真・善・美の美しい光を感得するに至るこれと同時に、宇宙の真源から煥発〔火が燃えるように、外に輝き現れること〕する偉大な霊気が、わが心の底に勃然として〔急に勢いよく〕湧き出るに至る。その功徳は実に不可思議である。そしてこれを唱念する方法に三つの手段がある。

誦唱＝声を出して「南無絶対無限尊」を唱える。

黙唱＝口をふさいで「南無絶対無限尊」を唱える。

黙念＝目を閉じて「南無絶対無限尊」を念じる。

この唱念法によって、わが心の中に安楽城を築き、進んで国家社会のために献身的に奮闘活躍することを、哲学堂（自称「道徳山哲学寺」）において唱道する教外別伝〔禅宗で、文字や教説のほかに、体験（禅）によって別に伝えられるもの〕の哲学とする。

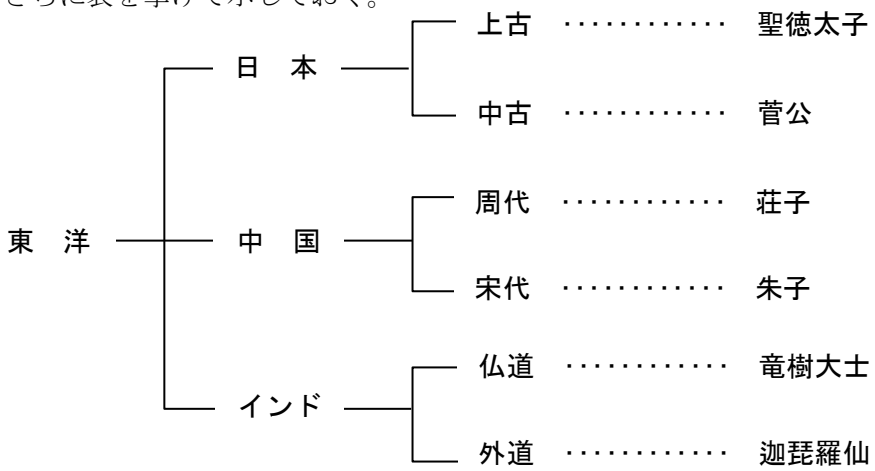
⑦ 六賢台

来観者は四聖堂を一覧し終わって、七、八間〔一間は約一・八二メートル〕後方へ戻り、赤く塗ってある三層六角の台上に登るはずの順序である。その台上には六人の大賢を奉崇してあるから、六賢台と命名した。建築物の周囲は六間ある点から見れば、六間台といってもよい。前の四聖は世界的であるのに対して、この六賢は東洋的とし、日本・中国・インドの三国の学界から二人ずつを選抜して、ここに奉崇することに決めた。

つまり、日本では聖徳太子・菅公〔菅原道真〕、中国では荘子・朱子、インドでは竜樹・迦毘羅の六賢である。そして中国では、荘子は道教の代表者、朱子は宋儒〔宋代の儒者〕の代表者であることはいうまでもない。

またインドでは、釈迦の哲学と婆羅門〔教〕の哲学とが互いに対抗して、大いに議論を闘わせたことがある。その当時、仏教の方では竜樹が出てインドの学界を風靡する〔なびき従わせる〕ことになったので、これを中興と称し、また八宗の祖師と崇あがめられている。つぎに婆羅門〔教〕哲学は数派に分かれて九十五種以上あったということであるが、その中で最も理論の高尚なのは数論哲学〔サーンキャ〕である。釈迦も最初は、その派の仙人について学ばれたと伝えられている。そして、この数論の開山が迦毘羅仙であるから、これを代表者と決めた。

さらに表を挙げて示しておく。



この六賢の肖像を扁額として台上に掛け、その中間に小鐘をつるし、各面の六賢の名称を鋳刻してある。その画工は中沢弘光氏、鋳造者は津田信夫氏、建築者は山尾新三郎氏である。この鐘を打つのについて規則が出来ている。「登り来て鐘を打つならガンガンを、三度つづけて六ガンとせよ」、「ガンガンを六とするのは六賢の、ひとりひとりに告ぐる心得」と承知してほしい。

つぎに、二階の壁間には自分の旅行の記念物中、石器・陶器を陳列し、また明治二十三（一八九〇）年以来収集した、神社仏閣の守り札数百種と、汽車の中の茶飲み茶碗百数十個を陳列しておいた。

さらに外部から屋根を望めば、煉瓦の一端に天狗が付いている。これは、天狗松の下に建てたためである。

⑧ 唯物園行路

六賢台を出て天狗松の下の小坂を下って右手にとれば、筆塚があるのを見る。この筆塚は自分が全国巡遊中、国民道徳講演の余暇に、人の求めに応じて悪筆をふるい、これより得た謝儀を積んで、哲学堂を開設するに至った記念碑である。それであるから、「字をかきて恥をかくのも今暫しばし哲学堂の出来るまで」との歌をよんでおき、また台の前面には、

余欲建設哲学堂使人修養身心荷筆歴遊諸州応需揮毫積其謝報充此資大半既成於是築筆塚以記其由云

〔私は哲学堂を建設し人々に身心を修養してもらおうと願った。そこで、筆を持っていろいろな所に漫遊して、求めに応じて書をしたためてきた。その謝礼金を貯めておいて建設費に充てようとしたのだ。大半がすでに出来上がったので、ここに筆塚を建立してその由来を記しておくことにする。〕

と彫り付けてあるが、その本意は、人の厚志を謝し、あわせて悪筆の謝罪をも含めたつもりである。その前を過ぎ去ると、道が前後に分かれている。この点を懐疑巷〔巷は小道や路地〕と名づけておく。これより先方に進めば唯物園に至り、後方に下がれば唯心庭に達する辻であり、「行こうか唯物、帰ろうか唯心、ここが思案の懐疑巷」というはずの場所である。

さて哲学は昔から、心を本拠とするか、物を根基とするか、必ずこの二つの道の一つをとるようになっている。そしてその極端が、一方は唯心論に走り、他方は唯物論に陥るから、庭内の東西両極端に、唯心・唯物の庭園を設置することになった。

つぎに、唯物論は経験を階段とし、理化・博物などの実験学を考証として立論するものなので、唯物園に達する道を経験坂と名づけ、その他の名称はみな実験学から取ってつけてある。

その坂の途中に、感覚巒〔巒は小さな山〕と名づけた所がある。これは、我々が経験するには、耳や目などの感覚によらなければならないという意味を示したのである。

ここから下を望めば、小池が扇の面となり、小橋が扇の柄となっているのを見ることができる。これよりさらに右の方をとり、松林（これを万有林という）の中に入れば、大理石で造った「三」の字形の腰掛け壇〔三字壇〕に達する。ここに哲学の元祖三人を祭る庭園を別置し、それを三祖苑と命名し、三祖碑を建てた。そしてその祖とは、中国では黄帝、インドでは足目仙人〔アクシャ・パーダ〕、西洋ではタレス氏である。

そのほか、松林の中に哲史蹊〔蹊は小さい路〕を設け、ここに哲学者の年表を掲示してある。

⑨ 唯物園内の設備

三祖苑の三字壇を去り、万有林碑のそばを過ぎて石段を下れば、唯物園に入る。ここにある、大文字で「物」という字を描いた芝壇〔物字壇〕が、まさしくその目標である。ここを一過して、そのそばにある客観廬と名づけた草亭〔草亭〕でひと休みするのがよい。客観とは哲学的術語であり、わが耳や目に触れる物界の方面を客観と呼び、これに対して心の方を主観ということになっている。

この周囲には進化溝・理化潭〔潭は水辺や岸〕博物堤〔堤は土手〕の名称をつけてあるから、いちいち石標について見てほしい。

そして、この庭園に沿って流れる水は、神田上水の分流であり、学界を一貫する川なので、自分はその名を数理江と命じておく。この江上に、望遠橋と観象梁〔梁は橋〕（形状から富士桟と名づけた）とを架けた。そして対岸を星界洲と呼び、これに半月台を建てた。進化溝を隔てて石窟がある。その暗黒な点は造化の幽玄神秘を示すつもりであり、これを神秘洞と命名した。ここから流れ出る水が進化溝をつくりあげる点は、進化の根源を究め尽くせば、結局は神秘になってしまう。唯物論の究極もまた同じであるという意味を例えたのである。

つぎに目を移せば、園内に狸の灯籠〔狸灯〕が立っている。これは、人生の真情を写したつもりである。狸はよく人を誑惑する〔人をだまして惑わす〕が、人間も詐偽虚喝〔いつわり・からおどし〕、驕慢阿諛〔高慢・へつらい〕、妄語〔うそ〕などの術に熟達している。しかしながら、このような種々の悪徳の中に、時々は光り輝く霊性を発揮することを例えて、狸の腹の中に灯籠を仕込んだものである。

つぎに、そのそばにある小池は、後天沼と名づけたけれども、その形は扇の面を見立てたものなので、通称は 扇状沼という。だから、ここに架けた橋は原子橋というのが本名なのだが、扇骨橋と名づけている。つまり、万物の原子が造化力により、次第に集合発展して、末広く世界人文を開発する点を、扇の面をもって暗示したのである。そして、後天の名称は哲学の用語であり、人が生まれた後に、経験を積み教育を重ねて発展する意味である。

つぎに扇骨橋を渡った所に噴泉がある。これを自然井〔井は井戸〕と名づけたのだが、その名のように地底から自然に噴出する天然泉であって、極めて清冷なので、試しに一口飲んでみてもらいたい。これ、天地自然から世界の原動力が、絶え間なく発揚する〔さかんに高まる〕ことに例えたつもりである。

⑩ 唯心庭行路

自然井から数理江に沿って、唯心庭の方に一歩を進めれば、造化澗〔澗は山あいの川〕と題する石柱が左の方に立っている。その名は断崖一帯の総称である。そして、巌石の間から混々として小さな流れが湧き出しているのは、やはり造化の妙用〔不思議な作用〕を例えるものと見てよい。

ここからさらに進めば二元衢〔衢は分かれ道〕に達する。二元も哲学の用語であり、物心の二者対立の名称である。つまり、この辻が唯物園と唯心庭との間にあたり、物心二者に関

する岐路なので、二元衢と命名したのである。

ここから上の方に向かえば、赤い字で「人生必須之処在此〔人生必須のところ、ここにあり〕」と表示してあるのを見る。これは便所である。もし下の方に向かって水際に下りれば、学界津に達する。そこで、来観の人々の中に、もし便所で大用小用を済ましたときは、この水辺に下りて手を洗うようにするのがよい。つまり、人生の不浄を学界で清めることができる。

ここから唯心庭に至る間は、断崖を開削して〔切り開いて〕道路を通じた所なので、これを独断峡〔峡は細長くせまい所〕と名づけた。独断とは、哲学上で経験に相対する語であって、物質上の学理を根拠とする方を経験派といい、精神上の思想を基礎とする方を独断派というから、経験は唯物に関係し、独断は唯心に関係している。唯物園に至る道に経験坂を設け、唯心庭に達する所に独断峡を置いたのは、そのためである。さらに数歩を移せば、唯心庭に入ることができる。

⑪ 唯心庭内の設備

唯心庭の主眼〔大切な所〕は心字池であり、中央に「心」の字の形に掘った池がその目標である。そして、山に近い方に心理崖を置き、倫理と心理とは池の両側に置いた。もし心を王と見れば、倫理と心理とは、左大臣と右大臣の位置にあたる。

また、その中心の小島を理性島と名づけ、理性はわが心の奥底にある本性であることを示したつもりである。そして、その中に鬼灯が立っているのは、人心の実情を例えた意匠である。もし、さきの狸灯を人生観とすれば、この鬼灯は人心観にあたる。つまり、我々の心中に悪念妄情が宿っているのは心の鬼にして、その内部に良心の光明が存するのは灯明のようなものであろうそこで、心の鬼が良心に押さえつけられるところを形にあらわし、鬼が灯籠をいただきつつ、しかもその灯籠に押さえつけられ、苦しそうにしている状態を示したつもりである。すべて世間の人々は、このとおりの良心の重量が、鬼を押さえつけるようにしてもらいたい。

そのかたわらに架けた橋を概念橋というが、概念は心の一種の作用であり、外界に関連する方なので、理性に達する前置きの作用に過ぎない。

つぎに、その左の方で噴き出している天然泉を先天泉と名づけてある。これは、我々が時によって心の最も深い所から、なんとなく高妙尊厳の消息に接する感じを起こすことがある。これを倫理学で先天の命令というが、実に教育や経験を超越する最高のものである。これを噴泉にあわせて先天の名を下して、そしてその純良な水が心字池に流れ入る点は、先天の命令が我々の心の中に伝わってくるのに例えたものと見てよい。

そのつぎに、池のほとりの高い所に立っている茅かやぶきのあずまやは、主観亭と名づけてあって、心界の休息所の意味である。つまり、唯物園の客観廬に対立する名目である。まず、この小亭〔小さなあずまや〕にひと休みして、心界の風光を観察してもらいたい。

⑫ 論理域

理学の研究が数学に基づくように、哲学の研究は論理による。そこで、哲学庭園としては、必ず論理の一区域を設けなければならない。そして、論理に関する心の作用を哲学上では認識の作用と名づけ、すべての事物を知覚し思考し推理するのは、すべて認識の作用である。ところが、思考推理を待たず、すばやく覚知する方を直覚という。もし、この二者をあわせるならば、いずれも意識作用となる。

今ここに、その関係を示すために、唯心庭と丘の上との間に、二通りの坂道を設けておく。一方は直接にして近く、他方は迂回して遠い。その直接である方を直覚径〔径は細道〕と名づけ、迂回する方を認識路と名づけ、そして認識路の方面に論理域を設けてある。

まず心字池から右の方の坂道、つまり認識路を登れば、途中に傘の形をした小亭がある。これを演繹観と名づけた。さらに登って丘の上に達すると、三脚鼎立〔三本の脚で立っている〕の休息台がある。これを帰納場と名づけておく。

この演繹と帰納とは論理の二大部門であり、すべての事実を取り集めて立論する方を帰納といい、思想の原則によって推論する方を演繹という。もし通俗の語でいえば、論よりも証拠を先にする方は帰納にして、証拠よりも論を先にする方を演繹というといっても差し支えなかろう。

今、ことさらに演繹観を渓頭〔水辺〕に置き、帰納場を丘の上に置いたのは、演繹は心の内で道理に当てはめて断定する方、帰納は広く目を外界に放って引証する方であるからである。来観者はよろしく演繹観で休んで内省し、帰納場で座って外望するように願います。

⑬ 絶対城すなわち読書堂

すでに論理域を過ぎて丘の上に進めば、認識路と直覚径の間に意識駅の腰掛けが二脚あるから、ここでもひと休みして、種々の観想をするがよい。この丘の上は宇宙を表示するつもりで、前に述べたように時空岡と名づけておく。その時間も空間も宇宙も、結局は絶対となる。

すべて何物でも、これと対立するものがあるときには、これを相対と名づけ、対立するものがなければ、これを絶対と名づけるのが、哲学上の決まりである。例えば、物は心に対し、心は物に対するというようなことは相対であるが、もし物心二者の本源実体を究めて、物にもあらず心にもあらず、何とも名状することができないところに達すれば、これを絶対というよりほかに名づけようがない。

そこで哲学堂内に絶対の一境を置く必要が起こってくる、つまり、帰納場と四聖堂の間にある建築物は、読書堂であるけれども、そのいうところの絶対を表示して、絶対城と命名することに決めた。もし宇宙そのものを総括すれば、もとより絶対の一つに帰着するはずだが、その中に森羅万象を網羅する道理なので、ちょうど絶対城の中に数万冊の書籍を網羅するのに比べられ、またその万象について深く調べれば、絶対の本体を思い出すことができるように、万巻の書を読み尽くせば、やはり絶対の妙境に到達することができる道理である。

要するに、書籍は哲学界の万象にあたると見た意匠である。その書籍は、自分が明治十九（一八八六）年から約三十年間に、貧嚢〔貧しい財布〕を傾けて買い集めた国書・漢書・仏書の中、特に明治維新以前の著作であるものが数万冊あるが、これを公衆の閲覧に提供している。堂内の右の方は国書・漢書であり、左の方は仏書である。

そして、そのずっと奥には聖哲碑を安置してある。四聖堂の中には肖像を置かない代わりに、ここに肖像を刻して、さらに台石には拙文〔自分のつたない文章〕を添えてある。

凡哲学東西相分　在東洋支那哲学以孔聖為　宗印度哲学以釈聖為首　西洋則古代以瑣聖為宗　近世以韓聖為首　故本堂欲合祀斯四聖而代表古今東西之諸哲　茲刻影像以致鑽仰之誠　如其位次則従年代前後　非有所軒載也

〔そもそも哲学は東西に分けられる。東洋においては中国哲学は孔子を宗とし、インド哲学は釈迦をその始めとする。西洋においては古代はソクラテスを宗とし、近世はカントをその始めとする。このようなことからこの四人の哲学者を合わせて祀り、古今東西のさまざまな哲学者の代表とし、そして四聖の姿を彫刻して彼らの学徳を真心をもって仰ぎ慕おう。四人を偉い順に並べるとちょうど年代順になる。軒先に簡単に掲げるような軽いものではない。〕

この肖像は田中百嶺氏が、故橋本雅邦翁の図に基づいて描いたものである。以上のようなわけで、書函〔本箱〕のある場所は聖哲院と名づけても差し支えない。

つぎに、階上は閲覧室に当てはめてあるから、これを観念脚と名づけたい。そのわけは、書を読んで種々の観念を凝らすという意味である。

さらに、屋上には観望台を置き、書を読んで飽きたときの休息所に当てはめてある。その台は四方を一望するのによいから、これを観察境、一名大観台と名づけておく。つまり、観念脚に座って観念を凝らし、観察境に登って観察を広げるようにする意味にほかならない。

そして、この図書館は大正四（一九一五）年十一月に、御大典記念〔大正天皇の即位礼記念〕として開設したものであることは、永く忘れぬようにしたい。そこで、図書館の前に記念碑を建てた。

⑭ 理想橋、理外門および幽霊梅

以上の聖哲院、観念脚、観察境を総称して絶対城と名づけたのに対して、これの隣にある無水溝を相対渓と名づけ、その渓に架けた石橋を理想橋といい、橋の外の小門を理外門と名づけることに決めた。

本堂には三か所に関門を設けてあるが、正面の哲理門は世間のいわゆる表門にあたり、常識門は通用門にあたり、この理外門は裏門にあたる。そして、これを理外と名づけたのは、宇宙間には哲学上の論究を尽くした上は、必ず「理外の理」が存在するのを知るからである。なおまた、その門の上扉を解いて外に開き、下扉を上げて内に支えるようにすれば、ただちに屋根を形作るようになる。これ、実に理外の理外たる理由である。

つぎに、理想橋の左の方に痩やせた梅の木がある。これを幽霊梅と名づけたのは、最初自分が駒込の住宅にいたとき、ある夜、その木の下に幽霊が出ていると言って騒いだことがあった。ところが、よくよく調べてみると、 室内のランプの光線が漏れて、それが枝に映っていたことがわかり、「幽霊の正体見ればランプなり」と言って笑ったことがあった。

その後、この梅を幽霊梅と名づけたが、哲学堂に天狗松があるから、これと夫婦にするようにと思い、ここに移したのである。その後自分が、ある暗夜十二時頃に、戸を開いて庭内の様子を見ていると、この梅の木の下に蕭々とした〔ものさびしい〕陰火〔ゆうれい火〕が燃えたり消えたりするのが見えたので、これは世間でいう幽霊火だろうと思い、その火の方

に近づいて行って見れば、昼間に掃除人が地に穴を掘り、その中で枯れ葉を集めて焼き、その上に土を載せて置いたのだが、夜半までその火が消えないものであった。このように、二度までも幽霊を現出したことがある。

つまり哲理門の両側に天狗と幽霊とを入れたのはこの梅とかの松とによって、呼び起こした意匠である。

⑮ 宇宙館および皇国殿

幽霊梅の隣にある一棟は宇宙館である。そして、その中に特別に置いた一室は皇国殿である。哲学は宇宙真理を研究する学なので、宇宙館を建てる必要を感じ、時々哲学の講話をしたり、または講習を開くために設けた講義室である。これと同時に、哲学は社会・国家の原理をも講究する学なので、世界万国中の最も美しい皇国殿を設ける必要を認め、ことさらに宇宙館内に一室を設け、その壇上に〔教育〕勅を掲げることに決めた。つまり、前の柱の上に「宇宙万類中人類為最尊世界万邦中皇国為最芙〔宇宙万類の生物の中で一番尊いのは人類であり、世界の国々の中で一番美しいのは皇国（日本）である〕」という二つの聯〔聯は律詩の一対の句〕を掛けたのは、このわけを示すためである。そこで、皇国殿は勅語奉崇室と名づけてよい。

その建築は四角の居室の中に、さらに横斜する一室を入れたものであり、世界無類の構造だろうと思うこれは私の考案であり山尾氏の設計である。また、その棟の上に烏帽子を載せたのは、皇国殿があることを表示するためであるが、これも他に比類ないものであろう。

この宇宙館のそばに三角形の一つの小さな丘があり、その頂に三角形の一つの小さなあずまやがあるが、これは三学亭というものである。

⑯ 三学亭および陳列

四聖堂は世界的であり、六賢台は東洋的であるから、今一つ日本的なものを設ける必要が起こってきた。そこで、さらに三学亭を建てることを工夫した。そして、三学は三角と音が相通じるので、すべて三角づくしの意匠を用いた。まず、三学の意味は何かというと、わが国には古来、神・儒・仏の三道がならんで行われ、その三道ともに碩学〔学問の深い人〕大を輩出しているもし、その大家の中の代表者を三道の中に求めるについては、十人十色の意見が起こるに相違ない。

ところが、私は碩学という点に重きを置き、三道の中でも最も著述の多い人物を選抜することに決め、著書目録を調べると、神道では平田篤胤、儒道では林信勝（羅山）、仏道では釈凝然であることを見つけ出しこれを奉崇することに決めた。三学亭の天井に掛けた石額の彫刻は、やはり田中良雄氏の作である。

ここから三角形の丘を下りた所の左の方に「尾無毛泉不白〔「尾」という字に毛が無ければ「尸」となり、「泉」に白が無かったら「水」になる。「尸」と「水」が合わされば「尿」となる〕」の石柱があるが、その句は尿所〔便所〕を示す判じものである。つまり、「尾」の字から「毛」を取り。「泉」から「白」を除いて、二つの字を合体させれば「尿」の字となる。その奥に硯塚を設け、筆塚に対立させた。

つぎに、哲理門の裏面に掛けた二つの聯は哲学の意味を詠んだ拙句であり、「一心大海起

智情意之波絶対古 月放真善美之光〔心を一つにするかのような大海は智・情・意の波を起こし、古くから変わらぬ月は真・善・美の光を放っている〕」の〔原文で〕二十字である。もし、その意味を理解しない人があれば、哲学に入って味わうように願いたい。

ここから数歩を進めれば、一つの倉庫が孤立しているを見る。この一棟は陳列所（無尽蔵）であり、階上を向上楼、階下を万象庫と名づけた。ここには内外周遊〔国内や海外の旅行〕の記念物を陳列することに決め、その中に陶器・石器（六賢台の階上にあり）を除くほか、種々雑多のものを玉石同架式に配列してある。また、妖怪棚、珍奇棚もある。とりわけ貴重なのは、文殊菩薩の木像〔木彫りの翁像〕（勝海舟翁寄贈）〔現在、東洋大学に所蔵〕、不動明王の画像、閻魔大王の彫刻物〔現在、中野区立歴史民俗資料館に所蔵〕である。これは、哲学堂の国宝的宝物と言っている。